私の宿意を御存じですし私の爲に此計畫を思付いて下すつたのは私の父に對する以前の交誼と、二つには大三輪氏に以前の怨恨をお復しの意だと云ふ事は度〻私へ御話があつたのです、吉見君の目的は――此事に加擔された目的は、私は知らないけれ共、渡瀬さんと御相談の上でせうから、其邊の事情は御承知の上だと思つたのですが、さうでは無いんですか。渡瀬さん、吉見君は兎も角、貴方が今になつて、其樣利慾の方に、』

『まアお待ちなさい。』と、渡瀬は順太郎の語を遮つて、凝乎と考へて居る。

幸一は不平滿々たる樣子で、『吉原君の樣に其樣に馬鹿正直な事を云つたつて、それは當世でないよ。僕と大三輪家の關係から考へて見て呉れたまへ、大三輪の妻君は、僕の親戚から歸つて居て、僕は叔母と呼んで居るんだよ。云はゞ、近い親戚も同樣なんだ、其親戚の大三輪に取つては、眞に致命傷とも謂つべき、此計畫に、僕は何て同意したと思ふのかね、吉原君、能く考へて見たまへ、私は君の爲に、大三輪商店に於ける地位を奪れたのだもの、怨恨こそあれ、君に同情する所以が無いぢやないか、其怨恨があるにも拘はらず、君の御父さんの爲めに復讐するのが目的で此計畫に同意したのだよ。考がへて見たまへ、私が同意すべきものか否かは、私の說明を待たんでも分り切てる話ぢやないか夫にも拘ら

ず、私が同意したのは、全然利益の爲なんだ、私は金が欲いんだ、實際、二三萬の直打より無い機械に、十萬からの金を與へて、毛唐の腹を肥すと云ふのは、餘り愚ぢやないかねだから、私は渡瀬さんの說に贊成したんだ、吉原君、君だつて今日の境遇を考へて見たまへ、餘り金の欲しくない場合ぢやなさゝうだよ。其樣滿らない理窟を云はないで、得を取りたまへ、得を取りたまへ。』

順太郎は何とも答へないで考へて居る。

渡瀬は太息を吐きながら、『吉原さん、君は潔白な人だから、自分の利益の爲にするのでは無いと云はれるのは、如何にも立派な男らしい、人は誰しも然樣ありたいです。併し、元來此計畫と云ふのが、實は潔白なものとは云へんので、云はゞ詐欺同樣なのだから、』

『えッ、詐欺同樣、』と、順太郎は顏色を變へた。

渡瀬は微笑を含んで、『吉原さん、貴方を初め我〻三人の行爲が、大三輪さんに對して詐欺だと云ふ事は、今更云ふまでも無い事だらうと思ふのです、それを君が驚かれる事は無』

『ですけれども、』

『いや、ですけれども何も無いぢやないか。』と、幸一は傍より順太郎の語を支へて、『君

にしても僕にしても、雇主たる大三輪氏を欺いて、其をして破産せしめようと云ふのだから、普通に詐欺と云ふのよりか、一層大なる罪を犯しつゝあるのだよ。君は父の復讐の爲だと云ふのだから、何となく名が美しい樣に聞こえるけれども、我々は如何だ。え、渡瀨さんや僕は何の爲に、此樣罪を犯さなきやならないかね。君の復讐の犧牲になつて、萬一此事が曝露して刑事の罪人になつたとしたら如何だね。君はお父さんの復讐の爲だから、自から慰む所がある樣なものだが、我々こそ好面皮ぢやないかね其所を考へて見たまへ、僕等にしても慰む所が無きやア、此樣危ない橋は渡れないよ。君は御父さんの復讐の爲、僕等は利慾の爲なんだ。打明た所が、利する所でもなきやア、此樣大事に加擔が出來まいちやアないかね。渡瀨さんは然樣で無いかも知れないが、併し、君だつて渡瀨さんに報ゆる所が無きやアならないだらう。吉原君自分の都合ばかり考へんで、渡瀨さんや僕の上に就いても、一考を煩はしたいもんだね。』

渡瀨は幸一の語が了ると共に、順太郎の顏を凝乎と見て、何と答へるかと待つて居るらしかつた。

順太郎は幸一の語に、渡瀨と幸一の本意を覺り得て、彼等が利慾一點張なるに慾いたけれども、幸一が語にも亦一理が無いでもない。併し、彼等は兎もあれ、自分は毛頭利慾の念を持たないので、今の場合何と處置したものであらうかと、思案を凝して見たけれども これと思付いた好い思案も無いのである。

『吉見さん、ては如何すれば可いのですか。』と、順太郎は暫時して幸一に問うて見た、

『それを今更、君が聞く事も無いだらう。横濱の方を違約をして、三人分割ようと云ふのですか。』

幸一は答へなかつたけれど、答へないのが然だと云ふ意を見はして居るのだ。

『それは私には出來ませぬ。』と、順太郎はきつぱり答へ、『それでは、此計畫は中止する事に願ひます。』

『えつ、中止する。』と、幸一は吃驚した、

渡瀨も稍氣勢ばむで、『吉原君、中止すれば、其て可いと云ふのかね。』

『可いも不可いも止を得んのです。私は復讐も思止まる事にするですから、今日の處は此て御別に致します。失禮しました。』

順太郎は立上つた、幸一は呆氣に取られて、唯順太郎を目成つて居るのだ。渡瀨は外方

を向いて、其面に冷笑を含んで居た。

順太郎は廊下に出たのである。其處に今來合せたのか、前から偷聽して居たのか、靜子は順太郎のインバチスを抱へた手に縋つて、

『御一人は御返し申しませんよ。兎も角今一度御相談なさるが能う御座んす。』

渡瀨に指圖されて出て來た幸一と、靜子と兎角して順太郎を元の座に押据た。

靜子と幸一とに强て元の座に押据ゑられた順太郎は、唯垂頭いて太息を吐くのみである

渡瀨は順太郎に對ひ、

『吉原さん、貴方の潔白なのには、私は實に敬服したてですよ。併し、今度の計畫なるものが、元來正しく無いので、貴方にしても、復讐の爲には其手段を擇ばない決心だつたうと、私は思ふのですな既に其手段を擇ばない決心で、大三輪氏を破滅させやうと云ふ以上は、貴方は唯復讐の望を遂さへすれば可いのてせう』

『それはさうです。併し、私が今執つて居る手段は、大三輪氏が私の亡父を陷いれたのと同一方法て、大三輪氏は其に依つて、父の財產を奪つたのですが、』

『其處です、大三輪氏が貴方の御父さんの財產を奪つたのだから、貴方が大三輪氏を學

ばれるのは當然で、それてこそ遺憾なく復讐したと云ふ者ではありますまいか。』

順太郎は頭を振つて、

『いえ、其は違ふてせう。大三輪氏は利慾の爲に、私の父を陷いれたのですが、私は復讐の爲に大三輪氏に打擊を加へやうと云ふのです。大三輪氏が利慾の爲てあつたから、私にも其を學べとお云ひになるのは、渡瀨さんの御語とも覺えないのてす。てすから、私は斷然此計畫を中止するか、豫定通に進行させるか其一を選ぶより外詮方が無いのてす。渡瀨さん、貴方の御話では、彼獨逸人からコンミッションを出させる事になつて居ると云ふ事てすから、其を吉見さんと御二人て御分割下さる事で、不承して戴きたいのてす。それて不可となれば、中止するより外詮方が無いのてす。』

渡瀨と幸一とは顏を見合せて、暫時默然として居たが、幸一は稍激した語調で

『吉原君、君は何かね。君は復讐爲得れば其で可い、乃分は滿足だ。貴樣等は如何ても可いつて、斯う云ふんだね。』

『いえ、さう云ふて居るのてはないのてす。渡瀨さんは、私の父との以前の交誼の爲に所謂義俠心から私を扶けて下さるのてすから、如何ても可いなぞとは、決して思ふ筈が無

いのです。』

『では、僕に對しては、』

『吉見さん、』と、渡瀬が傍から、『さう角が立つては面白くないです。吉原さんの云はれる所は、實に敬服の至ですから、吉原さんの意見に服從する事に爲ませう君が此計畫に同意されたのは、他に思惑があつたにしても、今更止むを得んですから、其事に就いて私が何とか工風をしませう。で、何卒私に免じて、吉原君を扶けて下さい。もう此談は此に止めて、大いに景氣を附ける事にしませう。靜子さんや、お前一つ、三味線でも持つて來て大いに取持て貰はうぢやないかね。』

靜子は三味線を取りにとて立つて行く

順太郎は居住を直して、

『兎に角、今日横濱へ行きたいですが。』

『もう遲いよ。』と、吉見は動かうともせぬ。

『吉原さん、實際今日はもう遲いです。明日の事になさい、實は横濱へ電報を打つて先刻斷つて置いたのです。』

順太郎は今は詮方なく、曲て渡瀬の語に委して、其日は靜子の家に止まる事にした。

十四

久和子と芳子の間が、其後どうも折合つて行かぬ。日外の紛紜の時は、久和子も芳子も各自私が惡かつたて、已れから折れて出たので、何の事もなく濟んで了つたけども、それからと云ふものは奥齒に物が介つて居る樣な口の利き樣で互に面白くないのである。

今日も原因と云ふ原因が無いのに、芳子の口の利き樣が、何か不快があるらしいと、久和子が云出して、茶の間に二人が睨合を爲て居るのである。

間に立つて困るのはお蝶で、もう其所に夕飯の膳を運んで來たのに、久和子も芳子も其に對はうとはせぬ。

『奥さま、お汁が冷ますです。』

『よいよ、打捨つといてお呉れ。私は戴きたくないのだから、下げて了つてお呉れ。』

久和子が此であるから、芳子が一人膳に對はう筈は無く、久和子の膳のみを下げて、芳子の膳を殘さるゝものでもないから、お蝶は所在なげに傍に坐つて居るのである。

『蝶や、私のも可いのだから、下げてお呉れよ。』

『はい。』

お蝶も今は詮方が無いので、膳を下げようとすると、久和子が聲を掛けて、

『蝶、お待ち。』

『はい、』と、控へる。

『芳子さん、貴方は何だつて食らないですか。』

芳子は默つて居る。

『私は氣分が惡くつて食べられないから、其で今止してるんですよ、私が止したからと云つて、何も貴方がお止しなさる事は無いでせう。』と、久和子は凝乎と芳子を見据ゑて、

『ですから、貴方が何か不快に思つてお居でだと申すのですよ、何も不快な事が無きやア、御膳を上るが可いでせう。貴方は口でこそ、何も思つて居ないなんて奇麗な事を云つてお居でだけど、』

『いゝえ、私は眞箇何にも思つて居たのではありません。』と、芳子は垂頭いたまゝで、

『私の御返辭の爲方が惡かつたのは――私は其樣氣では無かつたんですけども――私が

行屆かなかつたので御在ますから、何卒御免し遊ばして下さい、私――眞箇何の氣も若かなかつたので御在ますよ。』

『それなら、何だつて御膳を御食りでないんですか。』

『でも、私一人ですから、』

『貴方一人なら、何故食れないんですか。』

『何故ッて云ふ事はありませんけども、』

『面白くないからでせう。』

芳子が覺えず久和子を見た眼には涙が浮んで居た。

『面白くないなんて、其樣事はありませんけども、いつでも御母樣と御一緒に戴きますのに、私一人だと何だか、』

『可いは貴方。私は留守勝なのだから――其が貴方にも御父さんにも御氣に入らないんでせう……何時でも御一緒と云ふのではなし、一人だから食べられないって事は無い筈ですよ。それだのに……だから、貴方は私に不平を懷いてお居でだと申すのです。さうでなきやア、』

久和子が尙ほ云募らうとした時、電話の鈴が高く響鳴るのである。

電話口へ駈けて行つたお蝶は、直さに茶の間に歸つて來て、

『奥さま、且那さまから御電話で御在ます。』

『私にかい。』

『はい。』

久和子が急いで電話口へ行き、聽話器を耳へ當てると、急込んだ長純の話聲が聞こえる急込んで居るから、音調が高すぎて、聞取れない語が多いけれども、順太郎が今日留守に訪ねて來なかつたかと云ふこと丶、昨日横濱へ行つた順太郎が今日になつても會社へ顏を出さないので所々へ問合せて見たけれども、何所でも見掛けないと云ふことと、此の二ケ條が重なる主意であることは解することが出來た。て、御留守にも順太郎が來訪せぬ旨を答たへると、もし來たなら直ぐに商店まで電話て知らせる樣にと云ふことて、電話は斷た。

久和子は長純の電話に付いては、一方ならず心を痛めるのてある。順太郎が横濱へ行つた用事――製材機械を外國人から買入れの爲てある事も、久和子は能く知つて居るのてあ

る。其機械の代價は大三輪家の全財産にも等しい金額て、萬一間違てもあると、夫長純は破産し、如何なる境遇にならうも知れぬほどの大事だと云ふのも、久和子は長純から聞得て知つて居るのてある。

て、茶の間に歸つて來た時には、前の芳子との紛紜は忘れて、火鉢の傍に坐るより、芳子に對ひ、前とは反對つた語調て、

『芳子さん、大變な事が起つてよ。』

芳子も突如に斯う云はれては驚かざるを得ない、覺えず膝を進めて、

『大變な事が起つたつて、何樣事ですか。』

『順さんが昨日横濱へお行て丶、それつ限歸つて見えないんてすつて。』

唯此だけの事では、大變と云ふべき程てもないと、芳子は不思議に思ひながら

『彼方て何か用が出來て、お歸りなさる事が出來ないんでせうよ。』

『それならさうと、電信を打つとか、電話を掛けるが可いんてすのに、順さんからも、一緒に行つた幸さんからも、何とも申して來ないんてすつて。それも、普通の用なら可いんてすけども、間違てもあらうものなら、貴方も私も、斯して居られない程大變な事が發

るんですよ。』

久和子から順太郎と幸一が横濱へ行つた用向の仔細を聞くに至つては、芳子も心を痛めざるを得ないのである、けれども、順太郎に限つて、其樣な事があらうとは思はれぬ。今日は深更とも歸京するに違ひなく、昨日歸れなかつたのには、何か止むを得ない事情があらうと、順太郎の平生を信じて居るだけに、久和子ほどには驚かなかつた。

『ですけども、順さんの事ですから、間違などある筈がありませんは。』

『私も然樣思ふけども、』と、久和子は考へながら、『吉原さんのお宅に誰か遣つて見ませうか。』

『さうて御在ますね。晝間なら、私が行つて來ても能う御座んすけども、』

『車夫でも頼む事にして、』

突然電報と叫ぶ配達人の聲が聞こえたので、お蝶が駈出して行つた。

『順さんからかも知れませんは。』

『さうねえ。』

二女は順太郎の樣子が、此電報にて知れよかしと、お蝶が歸つて來るのを待つて居た。

お蝶が持つて來た電信を見ると、長純に宛てたもので、本文を讀まねば差出人の名を知る事が出來ないのである。けれども、久和子も芳子も的切順太郎が發した者と思ふのだ。

『順さんからてせうよ。』

二女とも同時に斯う云つたが、久和子はお蝶に對ひ、

『蝶や、且那さまが未だ御店に居らつしやるかも知れないから、電話で聞合せて見てお呉れ。』

『はい。』

お蝶が電話口へ行掛けると、久和子は呼止め、

『私が掛けるから可いよ。』

久和子が電話口へ行き、二言三言話したかと思ふと、『芳子さん、〳〵。』と、呼ぶのである。

『はい、』と、芳子が急いで茶の間を出やうとすると、其電信を持つて來る樣にとまた聲を掛けたので、久和子の命の儘にして其傍に行つた、

『其電信を讀んで頂戴。』

『はい。』

芳子が讀上げるを聞くと、長純が其頭取に推されて居る、豆糟會社の專務取締役澁谷重兵衛が今夕自殺したと云ふのである。

久和子が其儘を取次ぐと、長純からは其事は先刻電話で商店へも通知があつて今しも其方へ出向くところであるが、順太郎の樣子は未だ知れぬ、宅の方へも音信が無いか。あらば直ぐに知らせる樣に彼と云ひ此と云ひ非常に痛心して居ると云ふのである、で電話が斷れると、久和子は茶の間へ歸つて來て、芳子へ其事を話し、如何したものであらうかと、二女とも心を痛めるのであつた。

『御母さん、私順さんのお宅へ行つて參りますは。順さんは、母さん思ひの方ですから、何か音信が來て居るかも知れませんですよ。』

『さうねえ。さうして下さると可いんですけれども。夜だのに一人では、』

『私がお供を致しませうか。』と、お蝶が云ふ。

『お前がお出てだと、お母さんが御一人にお成りなすつてよ。』

『左樣で御在ますねえ。』

『御母さん、私俥て行つて參りますは蝶や、俥を命けさせてお呉れ』

『はい』

お蝶が下婢と二人で、出入の俥屋に俥を命じに行つた間に、芳子は納戸で羽織を着替へて來て、順太郎の事澁谷の事など話して居る所へ、お蝶が俥を伴うて歸つて來た。

夜はもう九時近くである、芳子を乘せた俥が原宿の吉原の門前に着くと、家の内にお禮が高聲に何かお絹に命じた樣子で芳子が門の戸を開けると同時に、内の格子戸が開いた。

お絹は格子戸の外へ出て來て、俥夫の提灯の灯に芳子を見るより、驚いた樣子で、

『御隱居さま、高樹町の御嬢さまが居らッしやいましたよ。』

玄關に出て來て居たお禮は、心配らしい内にも喜ばしげに、

『芳子さんさア、何卒お上りなすつて。』

『はい。』

芳子は凝乎とお禮を見上げたが、眼の中には潤を有つて居た。

『叔母さん、順さんは御歸宅なさいまして。』

『いゝえ、今日も今だに歸宅ませんのてね、心配致して居たとこて御在ますよ。貴女の

御俥の音を、順太郎かと思ひまして、絹を見せに出さうと致した處で御在ますよ。兎も角も、奥へ入來つして下さいまし。』

お禮は芳子を茶の間へ請じ入れて、

『昨朝出ましたッさり、何の音信も御座ませんから、實はお宅へ伺ひに上らうかと思つて居たとこで御在ます。』

『嘸ぞ御心配で居らッしやいませう。』

と、芳子は種々な事を云出して、お禮を驚かすのも氣の毒と思ふのて、唯此だけ云つたのてある。

『御商店の方へも、顔出を致さないので御在ませうね。』

『さうですッて。昨日の午後とか、午前とかに、吉見さんと御一緒に、横濱へ御行でなすつたつさり、商店の方へも御音信が無いのださうで御座ます。』

『横濱へ、昨日……。』と、お禮は一層心配しだした樣子で、『御父さまへも御音信を致さないので御在ますか。』

『さうですッて。ですから、父も心配して居るので御在ますよ。』

『まア、如何したと申すので御在ませうね。電信もあれば郵便も御在ますのに。横濱の方の御用が長引けば長引くで、其事を申上げれば能う御在ますのに。それに、一人で行つて居ると云ふのてはなし吉見さんに御賴申して、自分が歸りますとか、自分が殘つて、吉見さんを御歸し申すとか致せば、御父さんも御安心遊ばしますし、私も此樣に心配を致す事は無いので御在ますよ。』

『然樣で御在ますはね。』

『横濱へ行りましたのは、御商店の御用で御在ませうね。』

『さうですッて。何でも、大切な用ださうで御在ますよ。』

『えゝ大切な御用で御在ますッて。』と、お禮が聲は顫えた。

『ですから、順さんも、御一人で行らつしやる筈でしたのに、自然過失があつてはならないからッて、態〻吉見さんを御同伴なすつたんですつて。』

お禮は切なさうに太息を吐いて、

『其樣大切な御用なら、何だつて御斷り申さなかつたんでせう。碌に世間を見た事も無い、何かの掛引にも不馴な癖に、何だつて其樣大切な御用を御引受申したのでせう。芳子

さん、如何致したら能う御在ませう。あゝ、心配な事に……御父さまは、御宅に御居で遊ばしますか。』

『いゝえ、まだ御歸宅で無いんで御在ますよ。順さんの御樣子が知れない處へ、澁谷つて方が自殺をなさいましたさうで

『えッ、自殺を。』と、お禮は眼を瞶つて、

『御親類の方で居らつしやいますか。』

芳子は父と澁谷重兵衛との關係を話して、

『……其方でも、大層心配してお居での樣で御在ます。』

『それだと、尙ゝ順太郎が早く歸つてお呉れだと能う御在ますのに。』

折しも門の開いた音がしたので、お禮と芳子が見返ると、吉原さん郵便と高く叫ぶ聲が聞こえた。

芳子が玄關へ出て行かうとすると、お絹が早くも駈出して行つて、配達夫から受取つて持つて來たのは、一葉の郵便葉書である。

芳子はお絹の手から葉書を、お禮へ取次ながら、其差出人の順太郎なる事を知り得た

『叔母さん順さんからですよ。』

『え、順太郎からで御座ますか。』

お禮は嬉しさうな色を其面に浮べながら、眼には涙が溢れるのだ。

葉書の文面に依ると、少々事情があつて尙ほ三四日は歸宅し得ぬが、決して御心配なさ樣、委細は歸宅の節御話を致す可しと云ふのである。

お禮は何にも云はないで、其葉書に涙の眼を被うて泣くのである。

『叔母さん、何處からお出しなすッたんですか。』

『さようで御在ますね。』

葉書を打返して見たけれども吉原順太郎とのみで、其居所を認めてないのである、郵便局の消印はと見ると、發局の消印は、汚點の如く其形を存せるのみで、新宿局の印は明かに讀まれるのである

『東京の内に居らッしやるかも知れませんは。』

『えッ、東京の内にで御在ますか。』と、お禮は一層打驚き、横濱では無いので御在ませ

うね。』

『私は然樣思ひますの。今日の日附の下に、夕つて一字書いてありますでせう、横濱からだと、明朝か、今夜もつと遲くでなきや、着かない筈だと思ひますは。』

『そッさうで御在ますね。』

『何處に居らつしやるでせう。居らつしやるとこさへ知れゝば、私伺つて見ますけども。』と、芳子は太息を吐く。

『東京に歸つてゝ、御商店へも顏を出さず、宅へも歸らないッてまア、如何したと云ふので御在ませう。何か失敗でも爲たのではありますまいかね、御商店の大切な御用で參つたと申すのですから、其御用で何か失敗でも致したのではありますまいか。』

『さうで御在ますね。』、芳子も心配に耐へかねた體で、『其樣事でいもありますと、順さんも大變ですけども、父は尙々大變で御在ますよ。』

芳子は順太郎が今度横濱へ行つた店の用と云ふのは、非常な過失でもあれば、父の破滅にも關はるほどの大事で、其前に父も非常に心配して居たので、自分は其事を今夜母から聞知つた事を話して、

『……そんな譯なので御在ますよ。それですのに、順さんが東京に歸つて居らしつて、

尙ほ三四日お宅へ御歸りなさらないと申すのですから、容易ならない事が發つてるんぢやないかと思ひますは。』

お禮は大切な用とは聞いたが、今更めて芳子が話すほどの事ではないと思つて居たのだ。て。順太郎が商店へも宅へも歸れぬほどの失策を爲て居るものとすれば、それこそ自分等親子の破滅であると唯胸が打顫ふのみで、何とも云ひ得ぬのである。

芳子は順太郎の消息を此だけでも知り得たのだから、早く父へ報じて、善後策を取らねばならぬと、お禮に暇を告げ、待たせて置いた車を急がせて我家へ歸つた。

十五

長純は今朝七時近い頃に、漸く我家へ歸つて來た。昨夜は澁谷重兵衛が自殺に就いて、豆糟會社を調査する必要があつたから、他の重役其他と共に取調べた結果、澁谷が株の投機に手を出して、尠からざる痛手を負ひ、會社に大穴を空けて居たのを發見したのである、此事が世間に曝露すれば、會社の信用は地に落ちて結局解散するより他は無いのである、のみならず、長純の如きは、其清算の場合に到れば、多額の出金を爲ねばならぬの

で、横濱に遊はした吉原吉見兩人の樣子に、危胎を懷いて居た折も折とて一方ならぬ苦痛を感するのだ。で、澁谷の自殺が世間へ漏ぬ樣、新聞紙に掲げられぬ樣、夜より朝へ掛け社員を八方へ奔走せしめ今しも漸く歸宅し得たのである。

昨夜長純が歸宅らなかつたので、心配しきつて居た久和子と芳子とは、左右から澁谷の自殺が、非常な關係を持つて居るのではないかと問ひ、順太郎の消息は、電話にて其大要を報せて置いたけれども芳子が其家を訪うて居る間に、其母へ來た葉書の文意等をも述べたのであるが、長純は何とも答へず、如何にも疲勞した體で、一二時間睡つた上ならではと、直ぐに寢る事に爲たのである。

けれども、眶は合ひながら心は睡らず、會社の前後策、順太郎幸一等が不都合など思去り思來たれば、一瞬たりとも斯うして居らるべきでない、と思ふけれども疲勞に疲れて起出づべき氣力が無いのである。

澁谷も恨む可きだが、順太郎幸一等は云はう樣なき人非人どもである。平生の恩誼をも思はず、斯ばかりの苦痛を見せるとは、如何にしても免し難い奴等だ。何等の支障が起つたにもせよ、二人の中一人は立歸つて、其仔細を報告するのが當然ではないか。縱し彼等

自ら立歸る事の出來ぬ事情があるとしても、電信もあり電話もあり、其他にも取るべき手段はいくらもあるのに、彼程の大事を委任されながら、斯迄等閑に捨置くとは、如何にしても其意を得ぬ仕方ではないか。それに芳子が吉原の家にて見た葉書には、尙ほ三四日は歸宅せぬとあり、其日付時刻等より察するのに、彼等は既に東京に歸つて居るらしいと云ふ事であるのに、昨日商店を出たきり、何等の音信もせぬとは、愈々恨むべき奴等である、それと共に、彼等に何等かの奸策があつて或は乃公を欺いたのではあるまいか。疑へば斯うも疑はれる、いや、疑ふのが當然である。此疑が的中して居る樣な事でゞもあれば、それこそ乃公に取つては身の破滅ともなる一大事である彼二人に託した機械代は乃公の財產を盡したものと云つても可い、然るに、斯る事に立到るとは、何と云ふ事であらう。而も澁谷の自殺さへ、同時に發るとは、乃公の運命が此に盡きたのかも知れぬ漸く此までにした、財產と商店を、澁谷を始め彼等三人の爲に失ふとは、生命を奪はれるよりも一大事である、如何したものであらう、斯うしたものであらうと、苦痛煩悶に些も睡る事が出來ず、神經のみ昂奮せる耳を衝いて、電話の鳴る音が聞こえた。

『何處から電話を掛けてよこしよつたか知らん。』

長純は斯く呟き、半身を起して、耳を澄して居ると、久和子が電話口にて話しを爲る聲が聞こえる。

軈てばた〳〵と廊下を駈けて來る足音が聞こえて、靜かに唐紙を開けて入つて來たのは久和子である。

久和子は長純が眼を開けて居るのを見るより、急いで枕頭に行つて、

『所天、會社から電話で御在ますよ。何卒電話口まで御出を願ひますと申して居ります

長純は突と起上つて、寢衣の儘電話口へ行き、會社からの電話を聞くより、一方ならず打驚き、今直ぐ出張するからと答へ、電話が切れると、今度は此方より三十間堀の商店へ電話を掛けた。

長純は久和子を顧て、

『商店の方へもまだ、順太郎の消息が無いさうぢや。彼奴も幸一も、何で此程乃公を苦しめるのぢやらう。のみならず、澁谷奴までか大事を仕出かしよつて、乃公の命運も今度は……。』と、深い〳〵太息を吐くのだ。

『會社からの電話も、御心配な事で御在ますか。』

長純は澁面つくりながら首肯き、

『澁谷の方も、調べれば、調べるほど失態が多いと云ふのぢやから……私は直ぐに出掛けんければならぬ。』

『でも、瞬時も御安眠なさらないので御在ませう。』

『何も詮方が無い、私は直ぐに出掛けるでな、芳子を吉原の宅へ遣はして、彼の後に何か音信が無かつたらうか、問合させて、直ぐに私へ電話を掛けて貰ひたいのぢや、私は會社か、商店か、何方かに居るでな、忘れんやうに芳子を遣はすのぢやぞ。』

『承知致しました。』

久和子は芳子とお蝶とを呼び、芳子へは吉原方へ行くこと、お蝶は伸夫に仕度をさせる事などを命じ、自分は長純に着物を着替へさせなどして、軈て長純を玄關へ送出して、茶の間に歸つて、ぐつたりと坐つて、唯溜息を吐くのみである。

其處に芳子が羽織を着替へて入つて來て、

『御母さま、御父さまは實に御可哀相ですは、今御出掛の時の御顏の色が、眞青でしたね。』

久和子は太息を吐きながら、

『御病氣にでも御成りなさりはしないかと、私それが心配ですは。』

『眞箇で御在ますね。』と、芳子は涙含みながら、『それにしても順さんは如何なすつたと云ふのでせう、今日でもう三日になりますのに、何とか樣子を御知せでも可さゝうだと思ひますは。』

久和子は凝乎と考へながら、

『私も貴女も、順さんを見損つて居たんですはね。溫和しい人と思つて居たのが欺されて居たんですね。』

芳子は順太郎を其樣な男とは思はないが、今の場合辯護の爲樣も無いので、

『私もさう思ひますけども、何か事情があるのかも、知れませんは、私は兎も角も吉原さんへ行つて參ります。』

芳子は急いで我家を出た

芳子が順太郎の家に入ると、お魂は今まで泣いて居たらしい眼で、芳子を見るより、

『今其處で、順太郎にお逢ひなさいましたでせうね。お宅へ候ふのだと申して出たばかし

しの處で御在ますよ。』

『では、御無事だつたんですね。』と、芳子は云ふばかりなき嬉しさを眼の中に湛えて、

『何時お歸りなすつたので御在ます。』

『今朝十時頃でしたよ。』

『今私の宅へ行らつしやるつて御出掛なすつたので御在ますか。』

『さうですよ。』

『何處で行違になりましたか知ら。』と、芳子は暫時考へて居たが、『今朝まで、横濱に居らつしやつたので御在ますか。』

『聞いても、何ども申さないので御在ますよ。』

『此樣に長く行つて居らしッた所以でも御座ますか。』

『さうですよ。それでね貴女、氣分が惡いからッて、自分の机の所へ行つて、暫時何かゝて居ましたッけが、此所に出て參つた時には、涙含んでる樣ですから、何か心配な事がありはしないかと思ひましてね、いろ〳〵問ねて見ましたけれども、』と、お禮は襦袢の袖にて、一杯になつた涙を拭きながら、『御母さんの知つた事ぢやないと申しまして、何にも

話して呉れないので御在ますよ。』

『如何なすつたので御在ませうね。』と、芳子も心配さうで、聲には潤を有つて居る。

お禮は袖もて顏を被ひながら、

「商賣の事なぞ、私が聞きましたつて、解る筈はありませんから、其を申して呉れないのは詮方がありませんけども、横濱に二日も居なさやならなかつた譯などは、申してお呉れても可さゝなものではありませんか。それを申して呉れないので御在ますから私心配で御在ましてね種々な事を考へて、泣いて居たので御在ますよ。

芳子も首肯ながら涙を拭いて、

『眞箇で御在ますね。何だつて、御話なさらないので御在ませうね。』

『話さないだつて、二三日過つと分るからと申しましてね、それで心配さうに爲て居るんですもの、親の身では勝らないぢやありませんか。ですからね、私もさう申したので御在ますよ——二三日過てば分る事なら、今云つてお呉れでも可いでせう、親子の間に、何もお隱しでなくつてもつて申しますとね、御母さんはだから沒分曉いんだつて申しましてお怒りなんですよ。彼樣子ぢやありませんでしたのに、如何したかと思ひましてね私は悲

しくなりましてね。』と、また泣く。

芳子はお禮より聞くところでは、順太郎が我家へ行つたと云ふのだから、宅へ行けば繼母が引留めて、直ぐに父へ電話を掛けやうから、先づ可い樣なものであるが、此の事から父と順太郎の間に、何樣な紛紜が發らうも知れぬ、早く我家へ歸り、順太郎に一昨日來の樣子を聞き其上の事を思量へて置かねばならぬと思ふのである。

『叔母さん、私はお暇を致しますは、順さんに御目に掛りたいと思ひますから。』

芳子がはや立掛らうとした時使に行つて居た、お絹が歸つて來て、旦那さまに途中で御目に掛りましたら、之を御母さんへ上げて呉れろつて仰有りましたと、裏に何か書いた名刺を出した。

お禮はお絹が出した名刺を、取る手も遲しと見、芳子も傍から差覗くと、其は順太郎自身の名刺で裏に鉛筆で何か走書に書いてあるのだ、

『私には眼鏡を掛けなさや見えませんから、貴女讀んで聞かせて下さい。』

芳子は名刺を受けて一應默讀して、お禮に讀んで聞かせた文意に依ると委細の事は書齋の机の抽匣に入れて置いた遺書を見て呉れと云ふのである。

『遺書つて申しますと、』と、お禮は周章した頭へ聲で、『書置の事ぢやありませんか。』

『さうです、遺書の事なので御在ます。』

『まア、遺書なんぞを、』

お禮が立上れば、芳子もお絹も共にお禮に續いて、順太郎の書齋へ駈けて行つた。

机の抽匣を開けると、母上樣と上書を爲た一封が見出された。

お禮は一封を取上ぐるより、はら〳〵と涙を零して、

『まア如何したと云ふんでせう、如何したら能う御座んすですせう。』

『本統で御在ますね。遺書なんて、此樣事を爲さらないで、其仔細を叔母さんに御話なされば能う御在ますのにね、私の父に關係した事からなら、私どんなにでもして、順さんが御困りなさる樣には爲ませんのに、叔母さん、兎に角御讀みなすつては、如何で御在ます其上でまた如何にか、御相談を致しませう、叔母さん、お讀み遊ばしては如何で御在ますお絹どん、お前さんは私と彼方へ參りませう、叔母さん、お讀み遊ばして、御差支の無い所だけ、私へもお聞かせなすつて下さいましよ、お絹どん、彼方へ。』

お絹を促して其室を退かうとした芳子を、お禮は呼止めて、

『芳子さん、貴女は此處に居らしつて下さい。絹、お前何處で旦那にお逢だ。』

『四丁目の、電車の以前の終點の處で御在ます。丁度電車に乘らうとなすつて居らしつた所でした。』

『電車に乘つてお了ひだつたかい。』

『はい。私を御覽遊ばすと、乘るのを御止しなさいまして、御名刺の裏に何か御書き遊ばして、之を御母さんに上げて御呉れつて仰有つたので御在ますよ。そうして、直ぐにまた次の電車に御乘り遊ばしますから、お宅へ御歸り遊ばしましと申上げました、夕刻迄には歸るよ。御母さんを氣を付けて呉れよつて仰有つて、電車で行つて、お了ひなすつたので御在ますよ。』

『何處へ行くとお云ひだつたかい。』

『何とも仰有いませんでした。』

『お前がお聞きでなかつたのかい。』

『はい。』

『聞いてお呉れだと可かつたのにねえ。』

『左樣で御座ましたね、氣が付きませんで、惡い事を致しました。』と、お絹は啃然として退ッて了つた。

『叔母さん、早く御讀遊ばせ。私は胸がわく〳〵致しますよ。』

『濟みませんけども貴女讀んで下さい。あゝ、如何したら能う御座んすでせう。』

お禮は顏に袖を當てゝ泣きながら、耳を濟して居る。一封を開いて讀まうとした芳子の眼にも、溢るゝばかりの涙が見えた。

順太郎の遺書には、父順藏の病死は、長純の奸策に陷れられたのが其原因であつた事から、自分が復讐を思立つた結果が、今度の橫濱行となり。長純に大損害を與へて、再び起つ事の出來ない程の苦痛に、悶死に死ぬのを、自分は地下より快く見る意だ、今朝歸宅したのは、餘所ながら母上に御暇乞を爲たいからで、自分の生命は、今日明日の中に終るものと御承知を願ひたい。母上が艱難の中に自分を今日まで養育んで下された大恩の萬分一をも報い奉らずして、賴なき御身を殘し、自儘に身を滅し候事、嘸〻御歎き遊ばさるべし併し此も止み難き世の成行きと思し諦められたしとの旨を、こま〳〵と認めてあつた。尙、ほ大三輪の人々の中にて、芳子どのが母上と我等とへ、常に尠からぬ同情を寄せられたるは、怨敵たる長純の子とは申しながら深く謝する所に候まゝ、何れは御面會の節によろしく御傳を乞ふ云々と書添へてあつたのである。

讀む芳子も涙、聞くお禮は云ふまでも泣崩れて、讀了り聞了つた後も、二人とも唯泣くのみで、暫時は語を出し得なかつた。

芳子は泣聲に顏を有つて。

『父が惡いから、此樣事になるので御在ますよ。ですから、私は如何かして、順さんの御心の解ける樣にと思ひまして、種〻考へてた事がありましたけども、今となつては、もう詮方が御在ません。』

お禮は芳子の語に、泣顏を擡げて凝乎と見て、

『貴方は何ですか、順太郎が其遺書の樣な考を有つてた事を、前から御存じだつたんですか。』

『いえ、さうではありませんけども、父の致方が不可いと存じて居たものですから、』

『では、あの、順藏が病氣になつて死にましたのは、此遺書にある樣な事を、貴方の御父さんが爲すつたからなのですか。』

芳子は暫時は返辭を爲得なかつたが、面目なげに泣顔を俯向きながら、

『委しい事は知りませんけとも、此家の叔父さんが御病死遊ばしたのは、父が不良つた樣な事を、誰からでしたか聞いた事がありましたの、ですから、父がせめて順さんの御世話を爲て上げたらと、私は始終思つて居たので御在ますよ。』

お禮は何とも云はないで、また泣くのだ。

『叔母さん、父の事は私から、後で能く御詫を致しますが、順さんを早く、お探し申さないと、大變な事になりますから、私はお暇して、宅へ歸りまして、電話で店に報せまして、手分を爲て探させる事に致します。叔母さん、私がまた上るまでは、何卒失望なさらないで、お待ちなすつて下さいよ。能う御在ますか。後生ですから、何卒私が參りますのを、待つて〻下さいまし。』

お禮は依然唯泣いて居るのである。

芳子は掌を皷いてお絹を呼んで、

『お絹どん、私がまた候ふまで、叔母さんに氣を付けて上げて下さいよ。能う御座んすか、屹度御頼しますよ。』

お絹も唐紙趣に、膓氣ながら樣子を聞いて居たので、芳子の命じた所を、確と承知した旨を答へたので、芳子は急いで吉原の家を出で、我家へと駈出した。

十六

芳子が我家へ歸ると、中の口に出迎へたお蝶は顏色を變へて居る、お蝶も亦芳子の周章しい樣子に、

『お嬢さま、如何遊ばしたので御在ますか。』

『如何ッてね、私、』と、芳子は息を切りながら、『原宿から駈出して來たのよ。蝶や、あの、お父さんは御在宅なの。』

『はい、今少時前御歸り遊ばしました。』

と、お蝶は急に聲を潛めて、『順さまが大變な事を爲さいましたつてね、旦那さまが其事で、大層御怒遊ばして居らつしやいますよ。』

『お父さまは何處に居らしつて。』

『御居室に居らつしやいます。』

芳子は直ぐに父の居室へ行つて見ると長純は頭から蒸氣を立てんばかりの見膜で、久和子へ何か云つて居る所だ。

『お父さま。』

父を呼掛けて入つて來た芳子を見るより長純はぐつと睨つけて、

『芳、貴樣までが、乃公に勸めよつたで此樣事になつたのぢや。』

芳子は父の前近く座つて、

『御父さま、其は何の事を仰有るんですか。』

『何の事ぢやと、順太郎の事を云ふのぢや、貴樣ぢやの、久和子ぢやのが口を揃へて、順太郎は正直ぢや、彼の母が可哀相ぢやのと、種〻な事を云うて乃公を勸めよつたで、乃公も迂濶と彼奴を用うる事に爲たので、今度の樣な大事件を惹起したのぢや、唯大事件と口で云うて濟む事ぢやと、敢て驚くには足らんけれど、今度の事は實に、乃公に取つて大打擊で商店の維持は無論の事、其方達も路頭に迷はんければならんのぢや。久和子、芳子幾度云ふも甲斐ない事ぢやが、何故乃公に勸めて、順太郎を用ひさせたのぢや。』

久和子は垂頭いて何とも云ひ得ぬ。芳子は膝を進めて、父を見上げた眼に、はら〜と

涙を零しながら、

『私が順さんを、使つて上げて下さいつて、お願したのは惡かつたかも、知れませんけども、順さんが、何樣惡い事を爲すつたんですか。』

『何樣惡い事を爲たと、お前は其を今聞くのか。』

『はい。』

『乃公を欺いて十萬圓と云ふ大金を拐帶したのぢや。乃公は手形で渡して置いたのぢやが、銀行へ問合せると、既に昨日拂渡したと云ふのぢや、獨逸人から製材器械を買入れると云うて、乃公を欺いて十萬圓と云ふ大金を奪うて逃亡しよつたのぢや。』

芳子は泣聲を顫はしながら、

『お父さま、其は何で御在ますは、御父さまが以前爲すつた事が——順さんの御父さんを酷い目にお會はせなすつた罪が其罪が今報つて來たので御在ますは。』

『なゝ何を云ふ。』と、長純は烈火の如く怒つて、『貴樣が何を知つて、父へ對つて其樣な無禮な事を云ふのぢや。』

『御父さまは私が、私が何にも知らないと思つて居らつしやるんですね。』

『貴樣が何を知つて居るもので。』

『いゝえ、知つて居ます。順さんの御父さんが御死去んなすつたのは御父さんが御殺しなつすたのも同一ですは。』

『馬鹿ッ。順藏は病死爲たのぢや。』

『ですけども、其病氣つてのは、御父さんの爲なんでせう。』と、芳子は一入膝を進めた。

長純は芳子が何人から何を聞いて、斯樣な事を云ふのかと、怒れる面に眉を顰せながら。

『順藏は病死したのを、乃公の所爲ぢやなどと、何人が其樣な事を申しだのぢや。』

『何人が云はないでも、御父さんの御心にお聞きなさるが能う御座んす。』

『なに、おれの心に聞けと。』

『さうですは、御父さんの御心にお聞きなさるが可いんですよ。』

『乃公の心に聞けと云うても、何も覺の無い事ぢやから、』

『いゝえ、さうではないでせう。順さんの御父さんが御病死なすつたのは、御父さんが

惡策を講すつたからですッて。順さんや叔母さんが、原宿の彼樣處に彼樣に、哀れに暮してお居でなさるのも、御父さんが吉原さんの財產をお奪ひでしたから、』

『これッ、何を云ふ。』と、長純は芳子の口を塞がせやうと叱るが如く押へて、『貴樣が何人から其樣な事を聞いたか知らんが、乃公は全然覺の無い事ぢや、父に其樣な事の有無に拘はらず、子として父の事を、其云ひ方は何ぢや、父を罪あるものと信じて居るかの口氣は、何と云ふ不屆な事ぢや。此所には母さんも居るのぢやぞ他には何人も居らず、母さんばかりぢやから可い樣なものゝ、迂濶に其樣な事を云ふと云ふ事が、』

『ですけれども、さうだつて云ひますもの。』と、芳子は尙ほ膝を進めて、『ですから順さんが、順さんが御父さんの爲に、復讐を爲すつたんですつて……いゝえ、さうに違ひないんですつて。病死つた御父さんが、內の御父さんの爲に、苦み死を爲すつたから、御父さんにも苦み死を爲せて、其復讐をお爲なんですつて私確かに聞いたんですよですからね、御父さん、貴方が御惡いんでせう、他を御怨みなさる事は無いは。』

長純は自分が嘗て、順太郎の父順藏に對し、奸計を用ひて、彼の財產を奪つた事を、芳子が斯くまで能く知つて居やうとは、如何にも意外だ、彼當時の事を知つて居る者は、何

人であらう。今店に使つて居る者は、幸一を始め一人として知つて居る筈はない、當時幼少であつた順太郎も、無論知つて居樣筈は無いのだがお禮が何か聞はつツて居て、其を順太郎に敎へて、復讐の手段を執らせたものであらうか。他に思ひ當る人があるから、或は然樣かも知れぬ、けれども、お禮は其樣な逞しい氣象を有たないから、此は他に人があつて、順太郎を敎唆したものであらう。それにしても、芳子は何人から聞き得たのであらう、吉原の家から、今歸つて來たところから察すれば、矢張お禮から聞いたとより思へぬ。それとも、順太郎が我家に隱れて居て、芳子が其に會つて、此等の事を聞得たのかも知れぬ多くは順太郎に出會て、如樣の事を、父たる乃公に對つて云ふのに違ひないと察したのである。

『芳、其方は順太郎と內通して、共に事を謀りよつたのぢやな。』

『あらッ、そんな事を私が、』

『いゝや、それに相違ない順太郎は何ぢやな、原宿の我家に潛隱れて居るのぢやな、其方は其に逢つて、好加減な彼奴の語を信じて、父に對つて無禮な言を吐くのぢやな。』

『あらッ、其樣事が、』

『默れッ。』と、長純は大喝して睨付けた、

『其樣事はありません、其樣事はありません。私が順さんに逢つたとか、順さんと共に謀つたとか、其樣事はありません。』と、芳子は泣聲になつて『私が順さんと心を合せて、御父さんの御困なさる樣な事を…御父さんは私を、他人と心を合せて、御父さんを苦しめる樣な、其樣女だと私をお思ひなさるんですか餘りです〳〵、其樣事を仰有るのは、餘り酷う御座んすよ。私が其樣女なら、此樣に心配なんか爲やしませんは。お母さま、私はも う何にも申しませんから、自分の部屋へ行つてますから、後をお願ひ申しますよ。』

芳子は突と身を起して、父の居室を出去らうとする。

『芳さん、お待ちなさい、まア此室に居て頂戴、今のは御父さまが御無理ですけども、御父さまも種々御心配の處ですから、つい今見たいな事を仰有るんですしね、其を御怒りなすつちや惡う御座んすよ。』と、久和子は芳子を和めて元の處に座らせて、長純に對ひ、

『芳さんも昨日から大層心配して、種々奔走してお居でゝすのに、今見たいな事を仰有るのは御酷う御在ますよ。芳さんが順さんと共謀にお成りの筈もありませんし、順さんと內證で御會ひの筈もわりませんし、其は私が保證致しますよ。』

『けれども、今見た樣な無禮な事を、子の分際として云ひ居るぢやないか、動もすれば順太郎の爲に辯護しよつて、乃公が彼の父を苦しめて病死させたなぞと、怪しからぬ事を云ひ居るで、』

『でも、其は本當の事で御在いますでせう。』

芳子はまた斯う云ふのである。

『まだ其樣な事を云ひよるのか。』

『御母さまと三人で、他に聞く人が無いから申しますけれども、私聞いた事があります もの。』

『聞いた事がある。何人から聞いたのぢや。』

『御父さまが御自分で仰有つたのを。』

『なに、乃公が云ふたと。』

『さうです、御父さんが仰有つたのを、私伺つたんですは。』と芳子は頬を流るゝ涙の顏を、父に對つて振仰ぎながら、

『去年の四月の御病氣の時——御熱が四十度近くあつた時でしたは、種々な譫語を仰有つた中に、順さんの御父さんを何とか云ふ器械の事で御欺しなすつた事を悉皆仰有つてよ。』

長純は顏色を變へながら、

『熱の上で云うた事が、其が何ぢや。病氣の時は、思も掛けぬ夢を見るもので、夢の中の嘆言ぢや、何と云ふても、乃公の知つた事ぢやない。』

『いえ、其時ばかしぢやありまんは。今朝も、』

『なに、今朝』

『今朝眠ッて居らしッた時にも、順藏さん私が惡かッた、勘辨なさい〳〵て、幾度か仰有つてよ。』

『馬鹿な事を。』

長純は一言に打消さうとしたけれども、今朝は眠り得ないで苦しいんだと思ひながらも今芳子が語の樣に、夢に順藏に苦しめられた事がまさにあつたのであるで、芳子を睨据ゑながらも覺へず太息を吐いた。

『御父さんは、直さに馬鹿の事ッてお云ひですけれども順さんの御父さんを御欺しなす

つた罪が報ッて、御父さんが順さんに御欺されなすつたんですは。ですから、云はゞ御自分で御招きなすつたのも同一でせう、私ね、原宿で順さんには御目に掛らないんですけれども、順さんの遺書を見たんですよ。』

長純は目鞘をはづして、

『なに、順太郎の遺書を見たと云ふのか其遺書は何處に在る。』

久和子も傍から、『では、順さんは御死にの意ですか。』

『今日明日の中にはお死にの樣に書いてありますの。内の御父さんと順さんの御父さんとの、以前の事を悉しく書いてありましてね、渡瀬と云ふ人と、それから幸さんと、順さんと三人で、今度の事を、』

『なに、渡瀬が入つて入るのかそれに、彼幸一まで、』と、長純は切齒を爲ながら、

『久和さん、金太郎に� の準備をさせるが可い、原宿へ行つて、順太郎の遺書を手に入れて、其を證據に詐欺の訴を爲んければならぬ。捜索願は今朝出して置いたのぢやが、既に證據がある以上は、』

『御父さん、』と、芳子ははや立上る父の袖に取縋りながら『其樣事を爲さらないで、』

『え、、何をするのぢや、邪魔しよると、』と、長純は芳子の肩を突倒さんばかりに押除け、『久和子、何故早う俥を命せんのぢや。』

『はい。』

久和子が立上つた時、お蝶が持つて來たのは郵書である。宛名は大三輪長純殿とあり、差出人は吉原順太郎としてあるので。

『順さんから郵書がまゐりましたよ。』

久和子が渡すのを、長純は取るより早く封を引裂き、讀行く中に顏色も變り行きつゝ、はてはどッかと坐つて、深い溜息を漏した。

順太郎の手紙には、長純が其父を欺いて破産せしめ、次いで病死せしめた當時の事を委しく書いて、緊しく彼の罪惡を責め、自分は其復讐の爲に、今度の大打擊を汝に與へたので、汝に出るものは汝に反る、自然の制裁を受けたものと觀念するが可い。けれども、尙ほ覺らずして、余を其筋に訴へんとせば訴へよ、汝が當時の罪惡を證據立てる書類は云ふまでもなく、渡瀬郷三を初めとして、商店の老小使、店員の三浦田島内海等が證人として法廷に立つべく待設けて居るのである。余は亡父の復讐の爲に、斯る手段に出たのである

が、自分とても罪なき者とは思はねば、既に自ら決して居るのであるが、汝の答を得た上で、其答ふる所の如何により、余より進んで法廷に立ち、汝の罪惡を世間に曝露しやうと思ふのである、で、汝は汝の思ふ所を、今日の中に三十間堀の商店まで申送るべし。其上にて余が如何に決するかは、汝一家に大關係あるべしと云ふのである。

『御父さん、順さんから如何申して來たのですか。』

『これを見い。』と、長純は順太郎の手紙を投出した。

芳子は久和子と共に、順太郎の手紙を讀んだが、二女顏を見合せたのみて、何と云ふべき語も無いのである。

『芳、紙と筆を取つて呉れ。』

長純は取急ぎ手紙を認め、傳夫をして三十間堀の商店に持行かしめた。

十七

順太郎は彼の烏森の靜子が家にて、渡瀨郷三吉見幸一等が、自分の復讎の擧を助けたのは、全く彼等自身の利慾の爲なりし事を始めて知り得て、非常に吃驚もし憤慨もしたので

ある。幸一は元來大三輪が後妻の緣類であるから、彼が余の計畫を扶けやうと云ふのには何等か利する所がある爲であらうと察して居たけれども、郷三に其樣な利己心があらうとは思掛けなかつたのである、郷三は嘗て、自分の父に受けた恩顧に酬ゆる爲であると口癖の樣に云つて居たので、眞全其義俠の心から自分を扶けて呉れるものと思つて居たのに、それが利己心からであるとは驚かずに居られぬ。郷三が斯く卑劣な利己心から自分を扶けたとすると、其自分を扶けた其事が、唯其身の利慾の爲に自分を誘惑つたので、大三輪と我父との關係も、彼が云ふが如くであるや否や、或は其間に虛構のことがあるかも知れぬと、疑へば疑はれもするのである。一旦斯く疑念が發ると、順太郎は彼等を憎むの念が一時に嵩まつて、自分の復讎は兎もあれ、先彼等の利己心と戰はねばならぬと決心した。

『私は君等の爲に利用される者ぢやない。私の復讎を扶けると云ふのを枷にして大三輪で、彼等に對つて云つたのである。

から預つた此金を分配しようと强たつて、私は決して同意する事が出來ない。君等が遠て然樣したいと云ふのなら、私は復讎の決心を翻へして、大三輪に此金を返す事に爲たいと思ふ、君等は彼の獨逸人から受ける筈の、相當のコンミッションがあるぢやアないか私は

無論其樣物に望は有たないのだから、君等が二人で分配されるが可いのだ、君等が私の此意見に同意して下されば兎も角同意が出來ないと云はれるなら、私は此手形を引裂いて私は自分の罪を……此だけでさへ既に罪を犯して居るのだから、其罪を其筋へ自首するか、大三輪に申出るか、二つの内何れかを取らうと思ふが……渡瀬さん、吉見さん、他の弱點を利用して、不義の利を得ようとするのは君達にも似合ないぢやありませんか。』

二人とも此に對しては、何とも云得ないのである。靜子に命じて、順太郎に酒を勸て、泥醉させた上で事を計うと爲たけれども、順太郎が其手に乘らないので、有繋に非常手段を取るまでの決心も爲かねたのか、其夜も空しく明け、翌日も靜子が家に一日を爭論に暮して、翌々日の朝――今朝になつて、萬事順太郎の意見に從ふ事になつたのである。

順太郎は、事の成行によつては或は生命を捨てる場合に立至らうも知れぬので母へ暇乞かだ〳〵、今朝歸宅して遺書を認め置き、再び靜子の家に行く途上にて、長純へ宛書面を送つたのであつた。

長純の返書が三十間堀の商店に達すべき時刻を見計ひ、順太郎は自動電話にて內海に問合はすと、丁度其返書が來たところだと云ふ。直ぐ商店に行き、長純の返書を見ると熟議を遂げたければ、高樹町の宅まで來訪あるべしとの事に靜子が家に引返し、渡瀬と吉見に其旨を傳へ、自分のみ大三輪が家を訪ふ事にして今しも其應接の室に、長純が出て來るのを待つて居るのである。

長純が非常に怒つて居るであらう、何樣な意氣を以つて、何樣の言語を以つて自分に對するのであらかと、順太郎は應接の室に長純が出て來るのを待受けながら、其樣事を思續けて居たのであるが、入つて來た長純の態度は想像以外で、莞爾と笑を含んで居るのだ。

『吉原さん、お前さん能く直ぐに來てお呉れぢやつた。さア、今少し寬坐いで下さい。』

順太郎も此意外な待遇には、張詰て居た力も弛んで、丁寧に辭儀を爲るのだ。

『今日御招きで御在ましたので、早速伺つたので御在ますが、』と、語を斷つて長純の顏を見上げた。

長純は首肯きながら、稍暫く考へて居たが、

『順さん、お前さんの今朝の手紙は拜見したが、彼にはお前の誤聞も誤解もある樣ぢやし、我にも罪が無いとは云はぬ。お前さんの御父さんとの關係に就いては、非難せらる可き事が無いではないが、お父さんにも見込違はあつたのぢや。其當事の私の仕向方が、

或は惡かつたかも知れんが、其は唯私が私の財産を保護したい、商店の失敗の傍杖を喰ふだらうと思うたで、』

『傍杖と仰有るんですか。父が商店の代表者ではあつたが、貴方と父との合名組織で、其責任は共に無限と云ふのでは無かつたですか。私は然樣聞いて居るのです。』

『それは然樣ぢや、お前さんの云ふ通ぢや。』

『それだのに、貴方今何と仰有つた、商店の損失の傍杖に打たれてはならぬと。』

『さ、其處ぢやて。其處が私の失策でなお前さんに對して申譯の無いところぢや傍杖と云ふたのは、私の失言ぢやで、謝しますてな、氣に掛けん樣に賴むのぢやはゝは。』

『それは可いですが、貴方が自分の責任を免れて、私の父に損失の全部を負擔せしめられた結果は、如何であつたとお思ひなさるのですか。』と、順太郎の憂を有つた聲は顫えた。

長純は答へ得ない。

『父は身代限を爲て、昨日に變つた可憐さ窮境に陷つて、終に悶死したのですよそれとは反對に、貴方は商店を我物になすつて、榮華に誇つてお居でなさるのでせう。貴方の生活と、私や母の生活に比べたら如何です。』

長純は尙ほ默つて居る。

『私は斯ら聞いて居るのです、貴方が彼際に、私の父に力を合せて、善後策を講じて下されば、彼樣結果にはならなかつたのだと聞いて居るのです。』

『其點は私の失策ぢやで、既にお前さんに謝したではないか。』

『そればかりでは無いのです。父の其失敗――商店の其損失を招いたのは、貴方が御自分を利する爲に、商店の或者、或會社の技師等と共謀なすつて、其處に到らしめたのだと云ふ事です。』

『いや、飛んでも無い事を。』

『いゝえ、其には證人もあります、證據の書類もあるのです。』と、順太郎は語氣鋭く、『貴方が强て御爭ひなら、其證人も呼び、其書類も御目に掛けませう。大三輪さん、此でも御爭ひなさるのですか。御返辭は如何です。御返辭次第では、私も大ひに決する所があるのです。さア、御返辭を承はりませう。如何ですか。御返辭が出來ないのですか。』

長純は垂頭きながら太息を吐いた。

順太郎は長純が何と答へるかと、其樣子を目戍つて居ると、長純は聽て顏を擡げて、

『順さん、私は此上お前さんと爭はうとは思はんで、如何致せばお前さんが滿足されやうか、其を知りたいのぢや。』

『では、何ですか、私が今申した事を、貴方は御認めなさるのですね。私の父に對して貴方が御執なすつた不正不義の行爲を全然御認めなさるのですね。』

『それがぢやがね……いや、私は辯解せん意ぢやから、お前さんの判斷に委せて置くのぢや。』

『此ほどの事を、辯解せん意だとお云ひなさるのですか。それで解つたのです、私の父を破産させたのは貴方です、父を悶死せしめたのは貴方です。私は實は、多少疑を容れる餘地があつたので、其を確めたい爲に、貴方に面會を求めたのでした。然るに、今の御答では、最早疑ふべきで無いですから、私は御暇を爲ます』

順太郎が立上らうとしたので、長純は吃驚して、

『順さん、まア待つが可い。私の意見も述べ、お前さんの意見も聞き、謝すべきは謝し辯ずべきは辨じた上で、お前さんの滿足される所で、拆合つて貰いたいのぢやから、』

『其には及ばんのです、私は既に執るべき手段を取つて、今では復讐を遂げたも同樣で

すから、此上は私の身の結果を着けるだけの事です、最早、他に伺ふ事も述べる事も無いのです。』

順太郎は冷かな笑を含んで、凝乎と長純を見ながら立上つた。

『それでは私が困る。』

『私の父も嘸ぞ困つたでせう。』

『さう云はんで、今一度坐つて下さらんか、私には假に罪があるとして、お前さんと仲の好かつた芳子までが、明日から路頭に迷はねばならんで、』

『それは然樣でせう。ですが、順の父も貴方が今お云いなすつたのと同一事を、其際には屹度考へたでせう、其爲に何程苦しんだでせう。貴方は今始めて、他の苦痛が何樣であつたかと云ふ事を經驗なさるのです。』

『いや、私が惡かつたで、此通謝すのぢや。』と、長純は膝に手を突かんばかり頭を下げて、『貴方の滿足される通にするぢやで今一應坐つて下さつて、』

『いえ、私は貴方に滿足させて貰ふには及ばんのです。私は私の復讐の手段で、既に充分滿足してるのです、』と、順太郎は尙ほ立つたまゝで、『今少し委しく申しますと、貴方が

財産を失つて、家族と共に路頭にお迷ひなさるのが、私には無上の滿足なのです、聞くところでは、豆粕會社の方も、澁谷の失敗から大破綻を生じて、其方でも大打擊を御受なすつたさうですから、私は一層滿足して居るのですから、もう此上、貴方から滿足を與へて貰ふには及ばないのです。何時まで申しても、同一語を繰返すだけの事ですから此で御暇します。』

順太郎は斯う云ひ捨てゝ、應接の室を突と廊下に出ると、芳子が手巾を顏に當てゝ泣きながら、悄然と停立んで居るのである。

室内からは長純が必死の聲を絞つて、

『順太郎ッ、歸る事はならんぞ。』と、高く呼び掛けるのであつた。

『歸つてはならないと仰有るのですか。』と、順太郎は振返りながら、『もう云ふべき事も聞くべき事も無いのです。』

『いや、あるのぢや。』の、長純は芳子を認めて、『芳、順太郎を返す事はならんのぢやぞ』

芳子は涙の眼に順太郎の顏を見上げて

『順さん、まアお待ちなすつて下さいまし。私からも御願爲たい事がありますから。』

順太郎は芳子を相手にするのは、自然其情に動かされて、自分の決心が鈍るも知れぬと危まれるので、

『芳子さん、私は非常に多忙なので、此上御宅に留まる事は出來ないんですから失禮します。』

『さう仰有らないで、順さん何卒。』と芳子は順太郎の先方を遮つた。

『これ順太郎、銀行から受取りよつた十萬圓の金は如何爲よつたのぢや。』

『其金は私が有つて居るのです。』

『其處にか。』

『いえ、此處には無いです。』

『では、何處に在るのぢや。』

『何處に在らうとも、其を貴方に申す事は出來ません。』

『云はんければ、云はする方があるのぢや。芳子〳〵。』と、長純は手を振つてあせりながら、『巡査を呼べ、巡査を呼べ、今迄は耐忍したけれども、もう耐忍する事は出來ん、金太を派出所へ走らせて、巡査を呼べ、巡査を呼ばせろ。』

順太郎はつか〳〵と元の室に歸つて、長純の前に坐り、

『巡査をお呼になるなら、私は喜んでお待ち申しませう。私は自分の目的を達した以上は、自ら死ぬか、其筋へ自首して、罪相應の刑を受けやうと思つて居るのです。ですから、巡査が來て私を拘引するなら、喜んで拘引されませう、私が拘引されゝば、貴方も同じ運命をお免れなさる事は出來ないでせう。私の方には、貴方の以前の罪を明かにすべき、證據書類もあれば、證人も居るのですから、私は私の罪は罪として伏し、同時に貴方の罪惡を訴へるんてすから、巡査を呼んで公の法にお委せなさるのはの私望むところなのです。芳子さん、御親父さんの仰有る通、早く巡査を御呼びなすつて下さい。』

芳子は父の傍に坐つて、唯垂頭いて涙を拭いて居る。

長純は順太郎の平然として、寧ろ巡査を呼ぶのを喜ぶ體なるに、如何にしたものかと當惑しながらも、尙擬勢を張つて

『よし、其覺悟なら、此方にも覺悟があるのぢや。芳、何故早う巡査を呼びに遣らんのぢや。』

『巡査なんぞお呼びなさらないだつて、順さんの心が御濟みなさる樣に、如何にかなさ

りかたがありますてせう。』

芳子は父に對つて斯く云ひ、さて順太郎に對ひ、

『順さん、私ね貴方が、父さんに仰有つた事を、惡いとは知つてますけども餘り、心配ですから、廊下で立聽して伺つたのて御在ますよ、貴方が御父さんの爲に復讐をなさるのは、其は然當の事ですから私は其を怨は致しませんけれども…後生で御在ますから、何とか折合の着くお話に、御相談下さる事は出來ませんでせうか。順さんこれは、私から御願申すので御在ますよ。』

順大郎は横を向いて居て返辭をせぬ。

芳子は自分が豫て順太郎に盡して居る情誼の上から、順太郎が自分の語には多少耳を傾けるであらうと思つたのに、順太郎が煩擾げに、横を向いたのは意外でならなかつた。けれども、其身の父の爲に復讐しやうとの一念の嵩じては、平生の情誼は如何あらうとも、其に絆されられさうな事が無い、敵と思ふ者の娘に搔口說かれて、其で復讐を思止まらうとは、順太郎が思も掛けぬ事であらう、此も無理も無い。けれども、此儘推進んだなら、如何成行くであらうか。芳子は自分の力には及ばぬと知ると、一層悲しくなつて泣くより

外は無いのである。

長純は素より進退谷つて居るのである、何と爲樣との思案も浮ばないのである。で、泣沈んで居る芳子を、可愛相と見るのみで、唯齒を切つて全身を顫はして居る。

順太郎は芳子を顧て、

『芳子さん、貴方へは實にお氣の毒です併し、考へて見て下さい。私の父が貴方の御父さんの爲に、斯う云ふ羽目に陷つた時の私の母を考へて見て下さい、貴方が今御泣きなさる樣に、私の母も泣いたでせう、私が其時、今の貴方ほどの年に成つて居たら私も貴方見た樣に泣いたでせう、けれども、それと此とは少し違ふ所がある樣です私の母が、泣いたのは貴方の御父さんに泣かされたのだが、貴方が今お泣きなさる其苦痛は他の人の爲では無いのです、貴方の御父さんの罪惡が貴方を苦めて居るのですよ。私の父は自分に罪が無いのに、貴方の御父さんの煩悶以上の煩悶を爲て死んだのですよ、此處を能く考へて下さい、私にしても、貴方が平生、私の母に盡して下すつた好意は、深く謝して居るのですが其爲に復讐の念を飜へす事は出來ないのです、此も私の身になつて考へて下すつたら私を無理とばかりは思はれないでせう。』

芳子は泣きながら首肯くのである。

順太郎は長純に對ひ、

『大三輪さん、巡査を御呼び下さるならお早く願ひたいのです、私にはまだ、此から種種爲すべき事が殘つて居るのです早く爲て下さらんければ、迷惑です。早くお呼び下さい。何とも仰有らないのは、巡査をお呼なさらないんですか。貴方の爲には、それも反つて可いでせう。私はお暇爲ますが、御異存はありますまいな。』

『いや、返す事はならんのぢや。』

『では、巡査をお呼びなさらうと云ふのですか。』

『……。』

『何故返辭を爲さらなんのです。御返辭が無ければ、私は私の意思通に致します。』

順太郎が立上らうとするので、芳子は其袖に取縋つて、

『順さん、まア待つて下さい私はね、私はね、私は女の事ですし、如何致したら貴方の御氣が濟むのか、其思案も爲樣も無いんですけれども何卒私を如何でもなすつて、貴方の御父樣の御怨が霽る樣に如何にでも爲て下すつて、何卒思返して下さい、私は父の子です

から、父の此有樣を見て居る譯には參りません、順さん、私を如何樣にでもなすつて下さい。』と、膝を進めて順太郎の顏を見上げた。

順太郎は芳子には氣の毒に思ふけれども、其等に頓着して居る場合で無いから、態と素氣ない語調で、

『芳子さん、私は貴方には怨は無い怨の無い貴方を、私は如何する事も出來ないんです。』

『ですけれども、』と芳子は尙ほ膝を進めて、『ですれども、順さん、能く考へて見て頂戴い貴方が御父さんの爲に、私の父さんに怨を御返しなさるのと同一に、私も父さんの難儀を救ひたう御座んすは、貴方は御父さんに代つて御怨を御返しなさるし、私は父に代つて其怨を受けようッて云ふんですから、丁度同一事ぢやないかと思ひます。』

『それは理窟です。』と、順太郎は云淀みながら、『私は既に怨を返す迄に運んだのですから、二重に怨を返す必要もなしまた爲すべき事で無いと信じてるから、貴方を相手に爲る事は御免を被りたい、兎に角、御暇を爲ます。』

順太郎が三たび辭し去らうと立上つた時、靜かに唐紙を開けて入つて來た者がある。見れば、久和子が前に立つて、後に續いたのは順太郎の母、お禮である。

順太郎は惡い處へ母が來合せたと、はつと思ふ間に、芳子はお禮に絶着いて、

『叔母さん、能く入らしつて下さいました、私は如何致さうか、如何致さうかと思ひまして居る。』と、手巾を顏に當てゝ泣くのだ。

お禮も涙含みながら、芳子に手を取られたまゝ座つて、

『順太郎、まアお座んなさい。』

順太郎は詮方なさに座つて、垂頭いて居る。

お禮は長純へ無沙汰の詫などを爲た後で、順太郎に對ひ。

『順さん、お前さんは如何お爲なのですか。』

『……。』

『お前さんが私へ御遣しの手紙も、當家での樣子も承知しました。此だけの大事を御思立なら何故私へも相談爲てお呉れでない。』

『御母親さん、其樣滿らない事を、今更云つて如何するのです。』

『如何すると云つて、お前、此樣可怖しい事を。』

『何が可怖い事です、普通の事ぢやないか。阿母さんも、考て見るが可い、御父さんが失敗して、終に悶死をお爲だつた其當時の苦痛を、覺えて居ないんですか、其お父さんの失敗も、悶死も、お母さんや私が苦しんだ其原因を何だと思ふんです、其が悉皆大三輪さんの不正不義、奸策を弄して御父さんを陷れた結果ぢやないか、私は其を知らなかつたのだ、つい頃日まで知らなかつたのだ、知らない中は、唯一家の不幸と諦めて居たけれどそれと知つて默つて居られるか居られないか、私は實に口惜くつて、大三輪さんを幾度刺殺さうと思つたか知れない。けれども、刺殺すのは唯一時の苦痛を與へるだけで、宅の御父さんがお受けだつた苦痛、御母さんや私が受けた苦痛に比べれば、何でも無い。だから、私は御父さんや私達が受けたゞけの苦痛を、大三輪さんに復して遣るのだ。』

『ですけども、其所にはまた、平生の義理と云ふものも、』

『何の義理があるものか。阿母さん、私の決心は動かないよ……いやッいやッいやだ。阿母さんが何とお云ひでも、いやだ〳〵〳〵。』

順太郎はお禮が今云出さうとする語を打消し〳〵して耳に掛けやうともせぬ。

お禮は太息を吐いて、順太郎の顏を涙の眼に凝乎と見て居たが、軈て膝を摺寄せて、

『順太郎、お前が其程思込んでお居でのものを私が止めたつて止まつてお呉れであるまいから、私はもう止めはしませんよですがね、お前さんは此後如何爲やうとお思ひですかえ。』

『阿母さんは私の遺書を見たでせう。』

『では、如何でも生命を御捨てなんですか。』

『自分で生命を斷つか、大三輪さんに愬査に引渡されて、其筋の刑に服するかの二つです。』

『そんな事になつて、後に殘つた私は如何なるでせう。』

順太郎は垂頭いて暫時默つた居たが、

『阿母さんには實に氣の毒です。だけれども、阿母さんも阿父さんの其時の苦痛を、今更めて分つたのだ。私の樣な子を持つた因果だと諦めて、阿母さんの考通に……順太郎などと云ふ子は、疾に死んだものと思つて、阿母さんだけで覺悟を爲て下さい、私は此樣事を云ふのが辛くてならない、阿母さんもう、何にも云はないで。』とはら〳〵と涙を零し、手で顏を掩うて泣くのである。

お禮も芳子も泣き、久和子も涙含んで居る。今まで口を噤んで居た長純も、此時既に涙含んで居たので、つゝと順太郎の前に膝を進めて、

『順さん、私が惡かつた。私はお禮さんとお前さんに、此通手を突いて謝します。』と、畳に手を突いて、『私は今日と云ふ今日、私の既往の非を覺つたで、貴方の思ふ存分、如何樣に爲れても異存は無い、貴方が自殺して死ねと云はるゝなら自殺も爲やう、以前の罪を訴へると云はるゝなら、其にも異存はない。それに就いても、順藏さんの當時の苦痛を、今葬と思ひ當つたのぢや。私は如何ならうとも、久和子や芳子の將來が案じられてならんのでな、順藏さんも貴方方二人の將來を、何程深く心配されたらうかと、私も葬と思ひ當つた。お禮さん、貴方にも詫をせんければならん、順さん、貴方へも斯通詫を爲て居るのぢや。あゝ、私は何で彼樣な不正不義、親友を陷れる樣な事を爲たらう。利慾の念に驅られたとは、申すものゝ、私は貴方へ羞かしい、久和子にしても、芳子にしても、夫なり父なりが此樣な可憎さ男であると、知つたら世間へ對して嘸ぞ羞かしからうと、それも氣の毒でならんのぢや。順さん、私は貴方に萬事委せて、貴方の命令通に、如何でもなりますでな、唯芳子の爲に、私に表面だけでも、名譽を保たせて貰ひたいのぢや。私の惡かつた

事は、此通に謝して居るで、何とか思返して下さる事が出來まいか、順さん、芳子を可哀相ぢやと思うて下さい。』

長純は眞箇悔悟して、眞心から順太郎に謝して居るのである。けれども、順太郎の垂頭さながら横を向いて居る顏には尙ほ充分怒りの色が見えて、何とも云はぬ。芳子も久和子も涙を拭いて居る、お禮は順太郎が何か返辭を爲るであらうと、其顏を見て居たけれども、何時までも返辭を爲ないので、促さうと口を開かうとしたのを、順太郎は早くも認めて、頭を振つて遮るのであつた。

『順太郎、お前さんの樣に其樣に剛情ばかしを……。』

『阿母さん、默つてゝ下さい。』と、順太郎は母の語を遮つて、尙ほ默つて居る。

『順さん、私が此程御賴しても、聞入れては下さらんぢやな。』と、長純は聲に曇を帶びて、『順さん、私は私の爲に、貴方へ御賴するので無い、此芳子が可愛いからぢや。貴方は復讐の爲ぢやで、私に破産させると云はるゝも、其を無理とは思はんが、私が此際の願は私にせめて會社の方の責任だけも盡させて貰ひたいのぢや。それでないと、大三輪は此々の不德漢ぢやでと、私が死んだ後でも、其憎惡が芳子にまで及んで、人が相手に爲て呉れ

まい。生先の永い身が、世間から擯斥されては、世に在る思もせまひで、それが可愛相でならんのぢや。順さん、私は今から何處へなと行て了ふ意ぢやで、後は貴方の好い樣にして下さるが可い。以來貴方にも逢はん、芳子にも逢はん、お禮さんにも久和子にも今日で別れるのが最後ぢや。順さん、御預けした十萬圓の金の始末、會社を解散するとしての整理方法其他の事も、總て貴方に依賴するで、何卒好い樣に賴まするぞ、其次には久和子と芳子の事ぢやが、貧に暮すのは、父や夫の罪の報と諦めも出來やうが、世間に顏出のなる程に、何とか保護の方法を考へて下さる樣にな、此が私の終生の御願ぢや、もう此上は御依賴する事も無いで。』と、久和子と芳子に對い、『今聞いて居つた通ちや。お前方も其意で萬事順さんの差圖を受けるが可い。お禮さん、貴方へも御願ひ申して置きまするぞ。』

久和子も芳子も泣くのみである。お禮も涕を啜る音をさせて居る。

順太郎は今まで垂頭いて居たが、此時端なく頭を上げて長純に顏を見合せると彼の剛情我慢な憎む可き面を、滂沱たる涙に洗はせて、力なげに肩を落して悄乎として居る、傍には芳子と久和子が啜上げて泣いて居るのである。

『では、お別れぢや。』

『所天。』

『御父さま。』

立上らうとした長純に、左右から取縋つた久和子と芳子の哀むべき樣を順太郎は、可哀想と見て、覺えず涙含んだ。

『順太郎、芳子さんが可哀相に。』と、お禮は顏を被うて泣く。

『大三輪さん、お待ちなさい。』

順太郎は凝乎と長純を見て、

『貴方は眞實悔悟なすつたんですか。』

『更めて問かるゝまでもありませんぢや。』

『では、私の申す事は何に限らず、』

『無論の事で、私も大三輪ぢや、今更語を二つには致さん意ぢや。』

順太郎は暫時考へて居たが。

『私も此までと復讐の念を擲つ事に爲ます。』

『えつ。』

『いや、此で、私も滿足する事に爲ます。併し、十萬圓の金に就いては、其處置を私に委せて貰はんければならんですが、』

『それは申すまでも無い事で、』

『では、私はお暇します。阿母さん、貴方も安心して宅に歸つて居て下さい。』

順太郎は、直ぐに大三輪を辭し去つた。

* * * * * * * * * *

順太郎は其日の中に、渡瀨と吉見とを說き、彼等に各〳〵金千圓宛を與へ、橫濱の獨逸人には五千圓の違約金を與へて解約し五日間の、中に會社の解散に對しては、大三輪が五萬圓を提供する事にして殘金四萬圓餘を大三輪に與ふる事にしたのである。

て、大三輪一家の喜びは望外に出たので、芳子は父と母とを勸めて、一萬金を順太郎に贈る事にして、辭するのを强て受取らせる事にして、兩家の間は此に再び親睦の基を開く事になつた。

數月の後、順太郎は母お禮を大三輪に託して、自分は他日の成効を期して北米の加奈陀へ渡航したと云ふ事である。

復讎　後篇終

明治四十年十二月廿八日印刷
明治四十一年一月八日發行

定價金七拾錢

著作者　廣津直人
發行者　日本橋區馬喰町三丁目十四番地　瀧川民治郎
印刷者　京橋區日吉町四番地　高城寛雄
印刷所　京橋區日吉町四番地　民友社

不許複製

發行所　東京市日本橋區馬喰町三丁目　今古堂書店
振替口座四九〇七
關西賣捌　大阪東區南波邊町　杉本書店

今古堂發行書目

リットン卿原著
原抱一庵譯
安藤仲太郎畫
小說
聖人か盜賊か
●前編定價金四十錢
●後編定價金四十五錢
●郵稅各六錢宛

中村春雨著
鏑木清方畫
短篇小說
角笛
●定價金六十錢
●郵稅金八錢

黑法師著
鏑木清方畫
家庭小說
想夫憐
●定價金四十五錢
●郵稅金六錢

楓村居士著
鏑木清方畫
軍事小說
橘英男
●定價金四十五錢
●郵稅金八錢

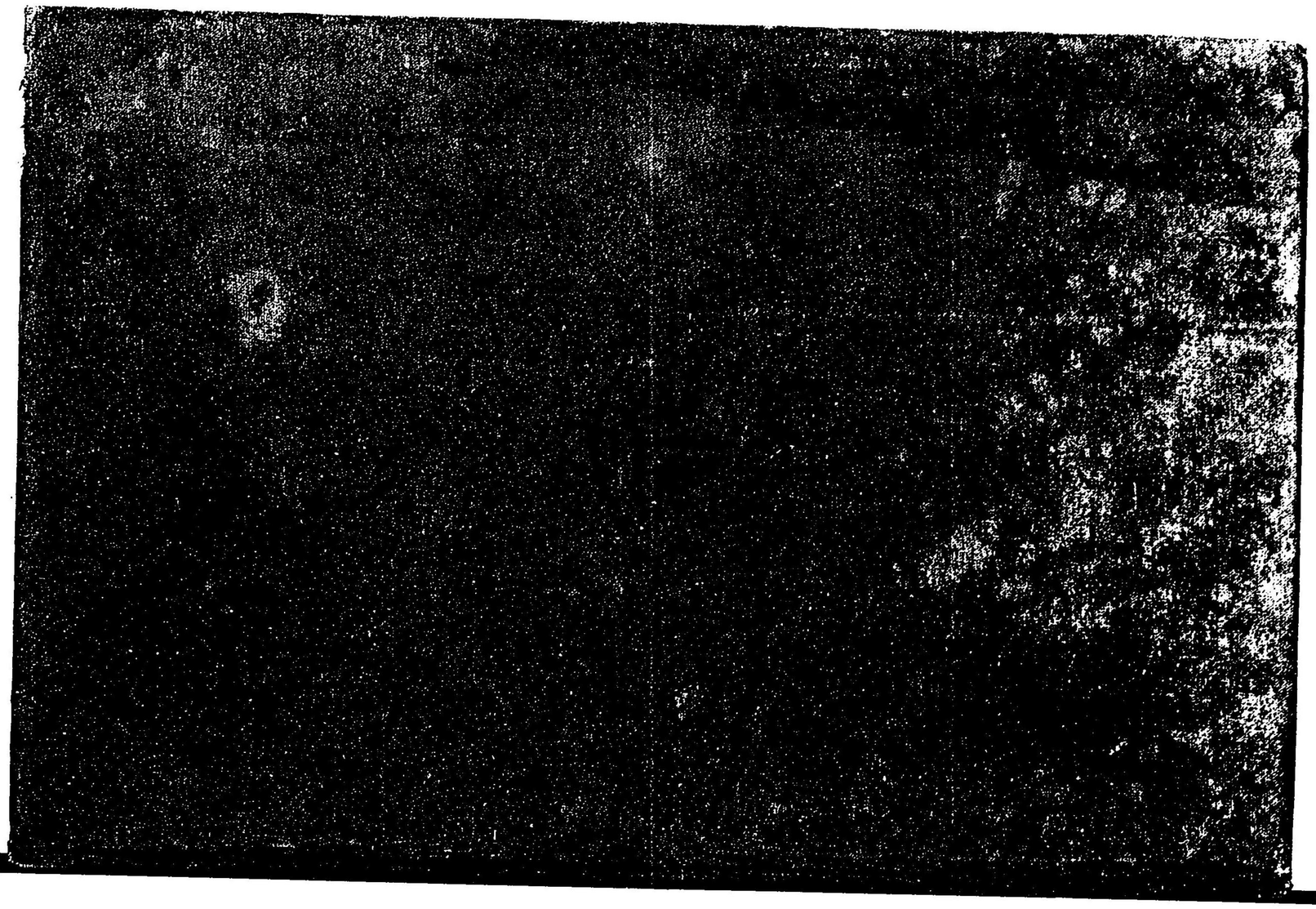
廣津柳浪著
鏑木清方畫
小說
二筋道
●前編定價金六十錢
●後編定價金六十錢
●郵稅各金八錢宛

德田秋聲著
鏑木清方畫
小說
結婚難
●定價金六十錢
●郵稅金八錢

橋本青雨著	江見水蔭著	廣津和郎 柳田英作著	德田秋聲著	江見水蔭著	正宗白鳥著
戀愛小說	小說	小說	家庭小說	健全小說	
愛の犧牲	雲がくれ	横戀慕	母の紀念	誰の罪業	
●●定價金六十錢 ●郵稅金八	●●定價金六十錢 ●郵稅金八	●●前編定價六十五錢 ●●後編定價六十五錢 ●郵稅各八錢宛	●●前編定價金六十五錢 ●●後編定價金六十五錢 ●郵稅各八錢宛	●●定價金五拾錢 ●郵稅金八	●●定價金五十錢 ●郵稅金八

柳川春葉著	渡部審也畫	齋藤吊花著	塚原澁柿園著	德田秋聲著	江見水蔭著
家庭小說	口	理想小說	歷史小說	家庭小說	冒險小說
新夫婦	松洲裝釘	殘る光	天草一揆	落し胤	鹿島灘
●●前編定價金七十錢 ●●後編未刊 ●郵稅金八錢宛		●●定價金六十五錢 ●郵稅金八	●●定價金六十五錢 ●郵稅金八	●●定價金六十五錢 ●郵稅金八	●●定價金七十錢 ●郵稅金八
柳川春葉著	渡部審也畫				
心の影					
●●定價金七十錢 ●郵稅金八					

今古堂發行書目

女の秘密	德田秋聲著 鏑木清方畫	定價金六十五錢 郵税金八錢
復讐	廣津柳浪著 和田英作畫	前編定價金七十錢 後編定價金七十錢 郵税金八錢
新家庭	川上眉山著 岡田三郎助畫	定價金七十五錢 郵税金八錢
焔	德田秋聲著 梶田半吉畫	前編定價金五十錢 後編定價金五十錢 郵税金六錢
春葉集	柳川春葉著 鰭崎英明畫	定價金四十八錢 郵税金六錢
一枝の筆	大町桂月著	定價金四十五錢 郵税金六錢

257
2
216